【報告】第 89 回民族学研修の旅

モンゴル、遊牧の民に出会う

揺籃の地オルホン川上流域と草原都市ウランバートルを訪ねる

講 師：小長谷 有紀（人間文化研究機構理事、民博併任教授）
イチンホルローギーン・ルハグバスレン（モンゴル科学技術大学教授）
期 間：2017 年 8 月 7日（月）～ 14日（月）

第八九回民族学研修の旅では、緑豊かなオルホン川上流域と国の人口の約半数が集う首都ウランバートルを訪ね、草原と都市、過去と現在を比較しながら、遊牧民の営みとその精神性をさぐりました。

オルホン川上流域には、遊牧民の興亡を物語る史跡が点在するとともに、緑豊かな草原は、今も多くの遊牧民の生活基盤となっています。首都ウランバートルはチベット仏教の布教とともに誕生し、社会主義時代を経て民主化以降急激に巨大化しました。

慢性的な渋滞、丘陵の斜面にまでひしめく住宅を見て、首都が今も膨張を続けていることを実感しました。社会主義時代とその前後、そして外資系の建物が入り混じる街の様子は、ここが今も昔も草原のなかの国際都市であることを物語っているようです。草原では遊牧民のゲルを訪問し、牧畜や乳製品づくりを見学する機会に恵まれました。器用に家畜を追う子どもたち、最小限の負担で羊を解体し、創意工夫に満ちた多様な乳製品をつくる遊牧民の姿から、広大な草原を無駄なく計画的に利用する彼らの柔軟な精神をうかがい知ることができました。

参加者のまなざしとともに、旅の様子をご報告します。

■写真撮影
足立典彦さん、猪股玲子さん、佐藤善秀さん、高田真理さん、土屋光永さん、馬場健一さん、堀田あゆみさん、風の旅行社

①突厥碑文に記された突厥文字。移動する遊牧民の歴史を刻んだ貴重な史料

③エルデニ・ゾーを囲む仏塔

②乳を勝手に飲まないように繋がれた子馬たち。子をおとりに乳の出を促して搾乳する

⑤加熱しながら乳を注ぎ落として撹拌しウルムをつくる。薬指で温度を確かめる

④放牧前の羊と山羊。毛の需要が高まり、最近は山羊の数が増えつつあるという

【行程】

■8月7日（月）
出国。モンゴル国の首都ウランバートルへ。

■8月8日（火）
三五〇キロメートルの道のりを一路ハラホリンへ。かつてカラコルムと呼ばれたその街は、オルホン川上流域に位置する。周辺はいくつもの遊牧文明が興った豊かな草原地帯。渋滞をかいくぐって首都を抜けると草原が広がり始める。オルホン川沿いのキャンプでこの旅初めてのゲル宿泊を体験。

■8月9日（水）
突厥（とっけつ）時代の遺物を紹介するホショーツァイダム遺跡へ。かつて突厥碑文の建っていたその場所と、博物館を見学した。キョル・テギン碑文は一九九八年に民博で開催した特別展「大モンゴル展」の目玉資料。碑文の一面には、漢文で唐と突厥が服属関係にあることが、別の一面には突厥文字で突厥を讃え鼓舞する内容が記されている。民博ではレプリカを展示したが、オリジナルを観ることができた。道中、遊牧民のゲルを訪問しアイラグ（馬乳酒）をいただく。馬の搾乳を見せてもらった。ハラホリンに戻りカラコルム博物館とエルデニ・ゾーを見学。周辺で興った遊牧文明を遺物を通して時系列でたどった。エルデニ・ゾーはモンゴル最古の固定仏教寺院。草原に突如現れる寺院群は圧巻。ただし、社会主義時代の弾圧を経て、寺院は一部しか残らなかったという。中では読経する僧侶の姿も見られた。その後、伝統的な温泉療養地ツァガンスムへ。ますます濃く深くなる草原。連日の雨でぬかるんだ道の移動は困難だったが、遊牧民には恵みの雨。①②③⑬

■8月10日（木）
終日遊牧民の暮らしを体験。遊牧民のゲルを訪問し、放牧、搾乳、ウルム（クリーム）やタラグ（ヨーグルト）など乳製品づくりを見せてもらう。宿泊先ではボーズ（蒸し餃子）をつくり、羊を解体する一部始終を見学した。最小限の負担で羊をしめ、余すことなく血や肉を取り分ける。加熱と撹拌を組み合わせて同じ乳から複数の乳製品を生